

リン・サオ みんなで育む恋のものがたり

「イワシヤ、ユー・ボー? (イワサ、いる?)」

夕食を終え一休みしていると、家の外から声が聞こえる。外を見ると近所に住む若者たちが、そわそわしながら集まっている。「リン・サオ」のお誘いである。

●巡回ラブアタック?

「リン・サオ」とは、ラオス低地農村部における伝統的な交際の形である。夕食が終わり、各世帯が就寝前の休息をとっているころ、時間にして夜の八時くらいになると、仲のよい年頃の若者が数人集まり、同じく年頃の女の子が住む家に訪ねて行く。

そこで女の子との会話の時間をつくり、しばらく話をしたら次の女の子の家へと順々に回ってあるく。日を変え訪問を繰り返すうちに、互いに気になる相手が定まってくる。そうなる友人たちは、その男を残して別の女の子の家に行き、一巡りしたら迎えに行つて一緒に帰る。こうした交際の進め方がリン・サオである。このとき集まったのも二〇歳前の若者たち。隣村へとリン・サオに行くことになったので、私にも声をかけてくれたのだ。

●恋の助け合い

この地域では、高床の家屋が一般的である。外から声をかけ、階段をのぼり屋内に上がる。

女の子とその家族はテレビを見ていた。おじいさんが若者一行を一瞥するとニヤリと笑い、女の子に残っていた食べ物とお酒を出すように言った。それをつまみに話をはじめた。学校での出来事や音楽の話などの世間話である。女の子と若者たちは、声は届くほどの、かといって近づきすぎない距離で、和やかに会話を楽しんでいる。

しばらくすると、一人を残し、私たちは別の家に向かうこととなった。女の子のいる家を二、三軒回ったあと、ある若者の家に集まった。その軒先でラオ・ラーオ (ラオスの焼酎) を回し飲みしながら話していると、今回のリン・サオのきつかけがわかってきた。どうも、残してきた若者が先ほどの家に住む女の子の好意を寄せており、彼を肴にリン・サオにやってきたようなのである。

ラオス低地農村部では、互いに助け合うことが重要な価値をもつが、なるほどその心はこうしたところにある

も垣間見える。一つの恋も助け合いのなかで生まれ、そのことで若者同士の仲もまた深まるのであろう。

●携帯電話が誘導する

交際のプライベート化
しかしながら、近年になりこうした恋の形にも変化が生じている。都市部から中古の携帯電話が流入する

に伴って、比較的安価に入手できるようになり、若者のあいだでも個人でもつ者が増えた。電話やメールでやりとりをし、約束を取り付けて会つたりしている姿も見かけるようになった。携帯電話の普及によって、実際のプライベート化が徐々にではあるが進んでいるのである。

こうした変化のなかで、リン・サオの形は変わってきたのだろうか。これからも変わっていくのだろうか。ラオスの若者の恋のものがたりは、これからのように育まれていくのだろうか。彼らの恋の行方に、おもしろい思いをさせてしまふ。



村の若者たちの晴れ舞台、ボートレースの練習風景。ボートレースなどの祭りが若者たちのもうひとつの出会いの機会となる

いわさ みつひろ
岩佐 光広
民博 機関研究員

専攻は医療人類学、生命倫理学。ラオス低地農村部における看取りの実践についての研究とともに、通文化的な視点からの生命倫理学の再考に取り組んでいる。